

令和 2 年 6 月 7 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02946

研究課題名(和文) 英語コミュニケーションにおける統語的プライミングを利用した統語処理の自動化促進

研究課題名(英文) Enhancement of syntactic processing automatization through syntactic priming in English communication

研究代表者

森下 美和 (Morishita, Miwa)

神戸学院大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：90512286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語によるコミュニケーションにおいて、プライミング効果がいかに生じ促進されるか、プライミング効果を英語学習にどのように活用できるかについて調査・分析を行った。日本人英語学習者と英語母語話者間の自然な対話では、統語的プライミングを引き出し、潜在的な文法学習につなげることは難しいことが分かった。次に、情報交換タスクを使用し、教室内での大学生同士の対話における統語的プライミングについて調査したところ、同レベルの学習者同士のインタラクションであっても、統語的プライミング実験の手法でモデルを提示しながら意味のあるやりとりを行うことで、ある程度の学習効果を得られる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語教育の現場で広く採用されつつあるコミュニケーション活動には、インプットを与えてアウトプットを引き出すプライミング効果を利用した学習が期待され、この点を教室での調査で明らかにすることが求められている。本研究では、教室でのコミュニケーション活動の中に統語的プライミングの要素を取り入れることにより、迅速且つ正確な言語産出を可能にする学習・指導法を提案し、後続の研究にも重要な役割を果たす土台を築くことができた。本研究の成果については、国内外の関連学会の大会・研究会や学術誌などで複数発表し、広く情報発信を行った。

研究成果の概要(英文)：In this research, we examined and analyzed how syntactic priming emerges and is enhanced as well as whether and to what extent it promotes syntactic learning through English communication. Established cases of syntactic priming were rare in Japanese university students engaged in interactive dialogues with a native English speaker. We then investigated possible syntactic priming between Japanese university students engaged in information exchange tasks based on a method of syntactic priming experiments, where they exchanged meaningful information by referring to examples, and the results suggested encouraging possibilities for learning effects.

研究分野：心理言語学

キーワード：統語的プライミング インタラクション wh疑問文 情報交換タスク

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

第二言語習得研究では、「理解可能な大量のインプットが言語習得を促進する」というインプット仮説 (Krashen, 1980)、「アウトプットが言語運用の自動性を高める」というアウトプット仮説 (Swain, 1985) が提唱されたのち、「コミュニケーション場面における意味のやりとりが特定の言語形式の習得を促す」というインタラクション仮説 (Long, 1988, 1996) が主流となって現在に至る。インタラクション仮説は、教室での指導や学習に応用されており、日本でも、従来の文法訳読法から脱却し、コミュニケーション活動を積極的に取り入れようという動きが広まりつつある。

一方、心理言語学的研究では、統語的プライミング(言語処理プロセスにおいて、直前に処理した文と同じ統語構造パターンを用いる傾向; Bock, 1986)が学習者の言語産出における統語構造の学習や統語処理能力の向上に利用できる可能性が示されている (McDonough & Trofimovich, 2009)。研究代表者は、日本人英語学習者を対象とし、統語的プライミングを利用した一連の実験を行い、言語産出において重要な役割を持つ語彙・統語情報とその処理プロセスについて新たな知見を得ている。また、それらの結果に基づき、統語的プライミングを利用した学習実験を行い、その効果が認められた。これまでの研究成果は、プライミングに関する国際会議 Cross-linguistic Priming in Bilinguals: Perspectives and Constraints (2013年9月9~11日/於: ナイメヘン)をはじめとする国内外の会議や学術雑誌で広く公開しており、以下のことが明らかになっている。

- 1) プライミング効果は熟達度によって異なる (Morishita, Sato, & Yokokawa, 2010 ほか)
- 2) モダリティ (文字 / 音声) の違いは、プライミング効果に影響を与えない (Morishita, 2011 ほか)
- 3) 刺激への接触回数が増えるほど、プライミング効果が高くなる (Morishita & Yokokawa, 2012 ほか)
- 4) プライミングを利用したトレーニングにより、語彙・統語処理能力が向上 (自動化) する (Morishita, 2012 ほか)
- 5) プライミングを利用したタスクにより、統語処理の潜在学習が促される (Morishita, Chang, & Harada, 2014; Morishita, Harada, & Chang, 2015 ほか)
- 6) ダイアログでは、モノログに比べてプライミング効果が低くなる (Morishita, 2013 ほか)

統語的プライミングは、対話においては、話し手の使用した構文を聞き手も使用する傾向 (Levelt & Kelter, 1982) として現れる。Morishita (2013) では、この点を踏まえ、絵描写課題や文完成課題などのモノログにおいて見られたプライミング効果が、スクリプト付きインタラクションタスク (ペアの一方が、他方に気付かれないように、あらかじめ用意されたプライム文を読み上げる) のダイアログにおいても見られるかについて調査した。全体としては、英語母語話者同様、日本人英語学習者にも熟達度にかかわらずプライミング効果が見られたが、日本人英語学習者の与格 / 二重目的語構文におけるプライミング効果は、英語母語話者のそれよりも有意に低く、インタラクションタスクにおいては、意味情報と統語情報の両方に注意を向ける必要があるため、日本人英語学習者における統語処理の非自動性が影響した可能性が示された。

Pickering and Garrod (2004) は、コミュニケーションにおける相互理解の達成は、無意識的・自動的な同調に依拠するという同調理論 (alignment theory) を提唱しているが、インタラクションがもたらすと考えられるこのような効果を、言語運用能力の習得にどのように活用するかという問題意識は、日本の英語教育においてははまだ共有されていない。これらのことから、英語教育の現場で広く採用されつつあるコミュニケーション活動には、インプットを与えてアウトプットを引き出すプライミング効果を利用した学習が期待され、この点を教室での調査で明らかにすることが求められている。

2. 研究の目的

Levelt (1993) の語彙仮説モデルにおけるスピーキングのプロセスでは、概念化装置 (CONCEPTUALIZER) で心的メッセージが作られ、形式化装置 (FORMULATOR) で文法符号化 / 音韻符号化が施され、調音装置 (ARTICULATOR) を経て発話に至る。言語コミュニケーションは時間的制約の中で行われるため、非母語話者については、言語処理プロセスの認知的負荷から、流暢さ・正確さ・複雑さの間に相殺効果が見られる。したがって、円滑な言語コミュニケーションのためには、語彙情報へのアクセスと統語処理の自動化により、言語処理の負荷を低減する必要がある。本研究では、インプットを与えてアウトプットを引き出すプライミング効果に着目し、主にダイアログ環境下での統語的プライミングの調査・実験により、日本人英語学習者の統語処理プロセスの分析・考察を行うこととした。英語教育の現場で広く採用されつつあるコミュニケーション活動に、統語的プライミングによる統語処理の自動化を促す学習を取り入れることを通じて、迅速且つ正確な言語産出を可能にする学習・指導法を開発することを目的とした。

3. 研究の方法

研究代表者たちのこれまでの調査で、初級レベルの日本人英語学習者の場合、メンタルレキシコン内に動詞の語彙表象が十分形成されていないためにプライミング効果が低い傾向にあることが明らかとなっている (Morishita, Sato, & Yokokawa, 2010 ほか)。また、教室でのコミュニケーション活動では、質問と応答がうまくできないためタスクの達成が困難となり、自然なインタラクションにおけるプライミング効果はほとんど見られなかった (Morishita, 2014)。さらに、熟達度にかかわらず日本人英語学習者の場合、平叙文を wh 疑問文に転換するタスクにおいて、統語処理の負荷が大きいことが分かっている (Morishita & Harada, 2015 ほか)。

本研究における統語的プライミングを利用したインタラクションタスクでは、Levelt (1993) における概念化装置を働かせる必要がほとんどなく、形式化装置での語彙・統語情報の処理についてもプライム文を足掛かりとすることができるため、言語処理の負荷を大幅に低減することができる。統語処理の自動化を促し、迅速且つ正確な言語産出を可能にすることにより、円滑な言語コミュニケーションとそれに伴う学習効果が期待される。

統語的プライミング実験の中で何度か同じ構文に接触することには、言語発達の初期段階に必要とされる模倣や反復による学習効果があると考えられる (Lightbown & Spada, 2006)。また、統語規則 (syntactic rules) は、本来、模倣できない性質のものであるが、プライミングの手法を用いた接触により、潜在学習が促進される可能性がある。従来のように、コンテキストから切り離されたモノローグの環境下ではなく、教室でのコミュニケーション活動における質問と応答など、より自然なコンテキストを伴うダイアログ環境下において調査・実験を行うことにより、統語構造の処理や学習のメカニズムをより正確に解明することができる。

日本人英語学習者の英語運用能力を向上させるためには、言語知識を増やすことと併せて、リアルタイムでの言語処理能力を高める必要があり、コミュニケーション活動におけるインタラクションが、その促進に重要な役割を果たすことが予想される。また、言語処理に関する研究は、語・文・文章という言語レベルで個別に検討され、語や文はコンテキストから切り離された形で扱われることが多かったが、インタラクションの中でさまざまなレベルにおける同調機能が働くことによって、言語獲得が促進されることが期待できる。その際、スクリプトを使用した統語的プライミングにより、学習者同士のインタラクションにおいても正しい文法形式の学習を促すことができると予想される。

これらの学術的背景にもとづき、以下の調査を行った。

調査 1: 自然なインタラクションにおけるプライミング効果に関する調査 1 (パイロット調査)

自然なインタラクション(ダイアログ)における日本人英語学習者の発話データを収集するにあたり、インストラクションの内容や質問(プライム文)の提示の仕方についての示唆を得ることを目的に、まずは研究代表者が、日本人英語学習者(大学生)5名と15~20分程度のインタビュー形式の対話を行った。文の長さ・複雑さが異なる20問の必須の質問(e.g., What do you do after school? / What do you think is important (for you to do) in improving your English?)を対話の中で使用し、学生にも質問を促した。

調査 2: 自然なインタラクションにおけるプライミング効果に関する調査 2 (本調査)

調査 1 (パイロット調査)の結果を踏まえ、インストラクションや質問(プライム文)の内容およびその提示の仕方などを適宜修正したうえで、英語母語話者と日本人英語学習者(大学生)31名の間約20分間の対話について、wh 疑問文の産出傾向ならびに統語的プライミング効果について調査した。研究代表者の大学に留学中の英語母語話者にアルバイトを依頼し、調査 1 から修正を加えた20問の必須の質問を対話の中で使用し、学生にも質問を促すように指示した。

調査 3: 教室でのインタラクションタスク 1 (パッセージに関する質問・応答)

教室でのコミュニケーション活動の一環として、情報交換タスクを実施した。インタラクション仮説によれば、流暢さが異なる対話者間の共同作業は第二言語の学習に役立つが、学習者間では必ずしも言語習得が促進されるとは限らない (Long, 1996 ほか)。Morishita (2014) は、目標言語に関する知識が乏しい学習者同士が学び合うためには、単に既存のタスクを与えるだけでなく、発話を促す仕掛けを用意する必要があると結論付けている。

調査 1 では英語教員である研究代表者、調査 2 では、英語母語話者がそれぞれプライム文の提示を行ったが、調査 3 では、McDonough (2011) を参考に、授業用テキストのパッセージを使用し、大学生のペアがお互いのパッセージについて交互に質問し合う形式の情報交換タスクを実施した。一方の学生のみにもスクリプトを与えてプライム文を提示させ、途中で役割を交替するという対話練習の中で、プライム文を提示する側においてもされる側においても学習が進むことが予測されるため、学習者間でも正しい用法やより複雑な用法を習得し、即座的に確かな発話が促進される可能性がある。

調査 4: 教室でのインタラクションタスク 2 (個人的な情報・世界知識に関する質問・応答)

調査 3 では、既存のパッセージの読解というカバータスクの性質上、プライムとターゲット間で wh 疑問文の種類、語数、単語の難易度などを厳密に揃えることができなかった。そこで、調査 4 では、調査 1, 2 の内容に近い個人的な情報・世界知識などについて交互に質問し合う形

式の情報交換タスクを使用することとした。名詞（補語）、形容詞、形容詞を修飾する副詞、動詞（句）を修飾する副詞、他動詞目的語、前置詞目的語、名詞（主語）のそれぞれが疑問詞となる疑問文、橋渡し動詞を使った疑問詞疑問文の 8 種類の wh 疑問文について、各 4 文のプライム文（合計 32 文）を作成した。プライム文は 4~12 語程度の短文とし、平易な単語のみを使用した。さらに、タスクの前後に、8 種類の wh 疑問文の中から各 1 文を選び、日本文にしたものを英語に訳す日英翻訳テストを実施した。

4. 研究成果

調査 1 では、対話データを書きおこし、日本人英語学習者（大学生）の wh 疑問文の産出傾向および、研究代表者の質問に対する応答や自らが新たに発する質問において、研究代表者の使用した語彙や構文をどの程度使用しているか（プライミング効果）について調べた。彼らの産出した疑問文の一部にはプライミング効果が見られたものの、1 人あたり 15~20 分程度の対話の中で、疑問文の産出数は平均 4~5 文ほどであった。日本人英語学習者の特徴として、1) "Do you have a question for me?" などのように、質問を促さないと主体的に質問することができない、2) wh 疑問文の産出が的確に行えない、3) プライミング効果が直後ではなく、多くの turn を挟んで見られる場合があるなどの傾向が見られた（森下、2017 ほか）。

調査 2 では、調査 1 と同様に対話データを書きおこし、プライミング効果を調べるとともに、全体の発話量や wh 疑問文の産出率についても詳しく分析した。全体として、日本人英語学習者よりも母語話者のほうにプライミング効果が目立ったものの、教室でもよく耳にする <What do you like + 目的語?> という誤った表現が、修正フィードバックを与えずに対話の中で最終的に自己修正できたケースなどが示されたことから、限定的ではあるが日本人英語学習者においても統語的プライミングの傾向が見られたと結論づけた。調査 1, 2 の結果から、自然な対話において偶発的なプライミングを予測するのは難しく、学習につながるプライミングを引き起こすようなタスクを設計する必要があることが示唆された（森下・河村・原田、2017 ほか）。

調査 3 と 4 では、教室でのコミュニケーション活動において情報交換タスクを使用し、日本人英語学習者同士の統制された対話練習の中で、統語的プライミングの可能性について調査した。調査 3 では、wh 疑問文（プライム文）のあとに正しい wh 疑問文を産出できた割合は、全体の 6 割程度であった。助動詞の抜け、助動詞の挿入（主語疑問詞疑問文の場合）などのエラーが目立ち、そのためプライミング効果もあまり見られなかった。プライムとターゲット間で wh 疑問文の種類、語数、単語の難易度などを厳密に揃えることができなかったという課題が残り、統語的プライミングの傾向についてより詳細に調べるには、その目的に合ったタスクを新たに作成する必要があることが示唆された（森下、2020 ほか）。

調査 4 では、全体的な wh 疑問文の産出傾向について、1) wh 疑問文の作り方（統語論・形態論）を体系的に学んでいない、2) 中学校、高等学校の教科書に出てきた平易な wh 疑問文や断片的な質問文は作れるが、英文をもとに形態統語的に適格な wh 疑問文を自由に作れるようになっていない、3) したがって、相手の発言を聞いて、その場でその発言を踏まえた wh 疑問文を作ることはできそうにないということが、改めて確認できた。一方、明示的な指導をしなくても事後テストの正答率が上がったこと、タスク内で産出した wh 疑問文の正答率が事前・事後テストを上回っていたことなどから統語的プライミングの可能性が示唆された（森下、2019 ほか）。

調査 3 と 4 については、調査回数が十分でなかったため、はっきりとした学習効果が認められたわけではないものの、ペアワーク後の学生のふりかえりにおけるコメントなども考慮に入れると、同レベルの学習者同士のインタラクションであっても、統語的プライミング実験の手法でモデルを提示しながら意味のあるやりとりを行うことで、ある程度の学習効果を得られる可能性が示唆された。本研究では、時間的な制約から、正しい用法やより複雑な用法を習得していく過程を観察するまでには至らなかったため、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 統語的プライミング効果を利用したペアワークの可能性：効果的な授業内タスクに向けての予備調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学：2019年度版	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 情報交換タスクによる統語処理の自動化：統語的プライミングの観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本認知科学会第36回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 387-392
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 英語母語話者とのやりとりにおける日本人英語学習者のwh疑問文の産出傾向および統語的プライミング	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学：2018 年度版	6. 最初と最後の頁 67-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原田康也・森下美和・鈴木正紀・横森大輔・遠藤智子・前坊香菜子・鍋井理沙・山田寛章・兼原奈な子・河村まゆみ	4. 巻 vol. 118, no. 516
2. 論文標題 自律的相互学習の記録と分析からインタラクションの楽しさへ：外国語としての英語自動処理の難しさを超えて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 第19号
2. 論文標題 統語的プライミングの促進と英語学習（シンポジウム報告）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばの科学研究	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・河村まゆみ・原田康也	4. 巻 vol. 117, no. 341
2. 論文標題 英語母語話者とのインタラクションデータにおける日本人英語学習者のwh疑問文産出	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 63-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森下美和・原田康也	4. 巻 -
2. 論文標題 日本人英語学習者の構文産出傾向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知科学会第34回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 1057-1060
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・鈴木正紀・森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 多様な英語能力の測定	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本認知科学会第34回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 1124-1131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 -
2. 論文標題 インタラクションはプライミングを引き起こすか：自然な対話の中の疑問文に見る構文産出傾向	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学：2016年度版	6. 最初と最後の頁 85-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森下美和	4. 巻 vol. 116, no. 368
2. 論文標題 会話表現の口頭練習におけるインタラクションの効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 57-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田康也・森下美和	4. 巻 vol. 116, no. 368
2. 論文標題 日本人英語学習者の応答練習における語彙的プライミング：自然なインタラクションにおけるプライミング効果	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 133-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木正紀・森下美和・原田康也	4. 巻 vol. 116, no. 77
2. 論文標題 言語技術の言語評価への応用：多様な英語能力の測定	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 日本人英語学習者のインタラクションにおけるwh疑問文の産出傾向
3. 学会等名 LET関西支部基礎理論研究部会2020年度公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 ペアワークにおける統語的プライミングの傾向：2種類の情報交換タスクにもとづく調査
3. 学会等名 2019科研費合同研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 プライミングと英語学習
3. 学会等名 2019科研費合同研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 情報交換タスクにおける統語的プライミングの傾向：授業内予備調査をもとに
3. 学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和・原田康也・河村まゆみ
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：自然なインタラクションにおける統語的プライミング効果
3. 学会等名 言語科学会第21回国際年次大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Harada, Y., & Morishita, M.
2. 発表標題 Invited talk: Language learning in interaction: How can we induce real-time learning through mental processing of linguistic information?
3. 学会等名 JWLLP-26 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤美香・原田康也・森下美和
2. 発表標題 WH疑問文誤用例の通言語的比較研究：母語獲得を考慮した教授法に向けて
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第49回年次研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森下美和・原田康也
2. 発表標題 モノローグとダイアログにおける統語的プライミング
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原田康也・柴原奈な子・河村まゆみ・森下美和
2. 発表標題 相互作用の記録と分析からインタラクションの楽しさへ
3. 学会等名 2018科研費合同研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morishita, M., Kawamura, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Syntactic priming in interactions between a Japanese EFL learner and a native speaker of English
3. 学会等名 ICPEAL 17 / CLDC 9 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 英語母語話者とのやりとりにおける日本人英語学習者のwh疑問文の産出傾向
3. 学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 How repeated exposure influences syntactic processing by Japanese EFL learners
3. 学会等名 Asia TEFL / MAAL / HAAL 2018 International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Diversity of tests and test scores of Japanese learners of English
3. 学会等名 53rd RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Harada, Y., Nabei, L., & Morishita, M.
2. 発表標題 Positive impact of intrusive recording devices on foreign language learning
3. 学会等名 53rd RELC International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Morishita, M.
2. 発表標題 How and to what extent does interaction induce syntactic priming in question sentences in natural interactions among Japanese learners?
3. 学会等名 16th Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 統語的プライミングの促進と英語学習
3. 学会等名 ことばの科学会オープンフォーラム2017 (第9回年次大会) (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morishita, M., & Harada, Y.
2. 発表標題 Syntactic priming by Japanese EFL learners in dialogue contexts based on different task types
3. 学会等名 SEMDIAL 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森下美和
2. 発表標題 インタラクションはプライミングを引き起こすか
3. 学会等名 第128回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morishita, M.
2. 発表標題 Imbalanced production of sentence structures by Japanese EFL learners: A study based on syntactic priming
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Harada, Y., Morishita, M., & Suzuki, M.
2. 発表標題 Learning to communicate in English through interactions: Promoting and prompting Japanese university students to ask and answer questions in English
3. 学会等名 日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原田康也・河村まゆみ・森下美和
2. 発表標題 外国語学習の基盤としての意味のやりとり：小グループ発表と質疑応答におけるプライミングの解明に向けて
3. 学会等名 ワークショップ「やりとりの中の外国語学習・外国語教育」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Morishita, M., Chang, F., & Harada, Y.
2. 発表標題 How L2 proficiency interacts with structural priming in Japanese EFL learners
3. 学会等名 22nd AMLaP Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Harada, Y., & Morishita, M.
2. 発表標題 Reproduction and elicited production of English question sentences by Japanese EFL learners
3. 学会等名 22nd AMLaP Conference (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

教員総覧(グローバル・コミュニケーション学部)
<http://www.kobegakuin.ac.jp/information/public/teacher/global/morishita.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	チャン フランクリン (Chang Franklin) (60827343)	神戸市外国語大学・外国語学部・教授 (24501)	
連携 研究者	原田 康也 (Harada Yasunari) (80189711)	早稲田大学・法学学術院・教授 (32689)	